

## 二、經濟同友會の生誕

戦後の日本財界の担い手として期待されたこの新団体は、各界の注目をひきつつ、昭和二十一年四月三十日午前十時より東京丸の内日本工業俱樂部で、發起人の大半が出席の上、創立總會を挙行した。この創立總會たるや、誠に生氣瀦瀦たるものがあり、新時代を背負つて經濟再建に挺身する先驅者の自負と氣魄が脈々と躍動する感があつた。

總會は世話人鹿内信隆君の司会で始まり、藤井丙午君が世話人を代表して挨拶に立つた。藤井君は敗戦後における政局の不安定、政府の無為無策を責め、かつ政府は民主主義の本質根幹にも触れず、たゞ機械的形式的な民主主義の採用に焦慮するのみであり、經濟政策においてもまた泥繩式な施策しか行つていないと政治の貧困を指摘した後

「財界、經濟界でも、その指導者達は客觀的にみれば、民主主義ないし自由主義の擬装により、古き資本主義態勢の温存を図らんとしてをるか、または日本の新しい産業經濟の在り方といった新し

い時代的な方向に對し、いわゆる感覺の欠如ないし不感症であるのを歎かざるを得ない。独り勞働組合運動のみが活発なる展開を見せつつある。この勞働組合運動の中から、新しい日本建設の原動力の擡頭を看取できるが、しかし現在は多分に衝動的なものがあり、今後正しき方向へ進むよう改善を要する点が多いと思う。

かような情勢の推移は我々經濟中堅人の奮起を要請してやまないものがあり、のみならずわれわれの知性、時代的感、愛国的至情はこれを默視することを許さぬものがある。かくて産業經濟のいろいろの分野において、中核的、躍進的役割を持つ經濟人有志が総力を結集して、日本の新しき經濟再建に積極的に寄与したのである。こういった熱意の凝結が今回經濟同友会の結成の動機となつたのである。」

と当時の社會情勢を説き、經濟同友会の生れる意義を述べた。藤井君は更に新しく生れるこの經濟団体の役割を展望して

「われわれの惧れるのは、弱い政治力の下に生れ出る内閣、しかもそこには強大な組織と牢固たる伝統をもつ官僚組織がある。たとえ政權は民主化されても、實際の具体的な産業經濟政策の運営は、依然として官僚陣營の手に委ねられている。その意味において、われわれ産業人が正しき方向に、しかも現実の職場に足を下した知識と經驗をもつて、積極的に政策の面にも寄与し、或いは、参画

してゆくことが非常に重大な意味をもち、このことが経済同友会の大きな役割となるだろう。」

と述べた。藤井君の挨拶後、議長に選ばれた諸井貫一君も経済の再建において中堅経済人の任務の重大性を強調して

「本会はわれわれ進歩的な中堅経済人の組織として、どこまでも生産を基盤とし、経済職能人としての立場から経済再建の諸問題に参加し、これを研究し、或るいは経済政策を樹てるといふようなことに進んで参りたい。またわれわれ内部においては相互に啓発し、進んでは更に緊密な同志的結合をもつて我々の目的に邁進したい。」

と、同友会の性格と任務を解明した。

更に同友会の性格については、議事中、規約提案のところで野田信夫君も

「本会は経済事業団体でないことは勿論、更に単なる研究団体若しくは親睦団体でもない。要するに、日本経済の民主化促進並に平和国家建設に寄与するための経済人の同志的結合体である。」と説明した。

規約及び初年度予算を審議した後、役員選任（世話人会に一任）となり、この結果、才一年度の幹事及び会計幹事に次の人々を選んで総会を閉じた。

〔幹事〕(當時の職名、敬称略)

青木均一(品川白煉瓦社長) 磯村乙巳(保土谷化学社長) 岩井雄次郎(岩井産業社長) 牛尾健治(神戸銀行頭取) 大塚万丈(日本特殊鋼管社長) 金井寛人(日本塩抜社長) 川勝傳(寺田合名理事) 川北禎一(日本銀行理事) 栗本順三(栗本鉄工顧問) 小池厚之助(山一証券社長) 郷司浩平(重要産業協議会事務局長) 櫻田武(日清紡績社長) 鹿内信隆(日本電子工業常務) 島田藤(島藤組社長) 清水康雄(清水組社長) 鈴木治雄(昭和電工常務) 鈴木万平(東洋紡績社長) 武富英一(大成建設會長) 寺田栄吉(大日本紡績常務) 永野重雄(日本製鉄取締役) 野田信夫(三菱重工業調査役) 萩尾直(東芝柳町工場副工場長) 藤井丙午(鉄鋼協議会事務局長) 帆足計(日本産業協議会創立委員) 堀田庄三(住友銀行東京支店長) 松本幹一郎(明治鋳業社長) 森晔(昭和電工社長) 諸井貫一(秩父セメント常務) 渡辺忠雄(三和銀行常務)

〔會計幹事〕

鈴木治雄(兼任) 堀田庄三(兼任)